



ほうきづくり講習会参加者の皆さん

と云われていた理由です。そんなほうきも時代が進むにつれ、掃除機の登場や高度経済成長による職業の選択肢の増加により、携わる方は減少し、現在、市内に職人はいなくなっ
てしまいました。

立ち上がった
「難波田城いきものがかり」

そこで立ち上がったのは「難波田城いきものがかり」。難波田城公園の花壇・畑の管理や伝統的作物の継承を行う市民団体です。当団体の事務局長であり、難波田城・水子貝塚両資料館の市民学芸員である小森さんが地域のほうきとその現状を知ったことをきっかけに、技術伝承に向けて動き出しました。

平成29年度、難波田城いきものがかりの皆さんが「富士見市が誇る座敷ぼうき作りの技能と文化を後世に伝えて

地域の風土を活かして作り上げられたほうき産業は、先人たちが築いた地域の文化です。大切なのは、道具や技術とともに、ほうき産業に携わっていた方々の想いを残すことと、今伝承に
関わっている方々の熱意を広く伝えていくことです。地域の力で受け継がれていく大切なほうき産業の歴史に触れてみませんか。

受け継がれる技術と想い

「いきたい」との想いで、富士見市協働事業提案制度に応募し、採択され、今年度の事業実施となりました。これまで、ほうき作成手順のビデオ撮影や講習会を行い、1月から市内各施設で巡回展や実演会を実施しています。

事業実施を通して伝承に積極的な方々が集まりつつある一方で、大きな課題が残っています。材料となるホウキモロコシの栽培です。

現在、市内では生業として栽培している農家の方はおらず、難波田城いきものがかりが畑の一部を借りて栽培しているのが現状で、伝承に十分な量が確保できていません。そのため、業者の方から海外産のものを分けていただいています。海外においても自国向けの栽培にシフトしており、いざれ入手が難しくなると言われています。

手ぼうきの製作実演

元ほうき職人・浦野幸吉さんによる製作実演を行います。
とき／2月17日(日)午後1時30分～2時30分
場所／中央図書館展示ホール
問合せ／難波田城資料館 ☎049-253-4664

巡回展『富士見のほうき作り』

市のほうきの歴史と座敷ぼうき製作技能伝承者育成事業を紹介します。問合せ／難波田城資料館 ☎049-253-4664

| とき | 場所 |
|------------------|------------|
| 2月7日(木)～10日(日) | ふじみ野交流センター |
| 2月15日(金)～20日(水) | 中央図書館 |
| 2月22日(金)～3月3日(日) | 難波田城資料館 |

伝承キーパーソン



元ほうき職人
浦野幸吉さん

若い方のアイデアで時代にあったほうきの活用方法を

私が職人を目指したころは、ほうき屋は地域の花形職業で、この地域に銀行などを誘致できたのもほうき屋やその組合の活動によるものと言われています。当時の鶴瀬村周辺は土質が良いうえ、品種もほうきに適しており、素材の良さが一番の魅力でした。

当時のような需要のない今、産業として復活するのは難しいと思います。これからは若い方のアイデアを活用して、現代にあったほうきの活用方法で伝承してもらえればうれしいです。

ホウキモロコシ栽培協力者募集

5月に作付けし、8月に収穫します。手入れはほぼ不要で、小さな面積でも栽培可能です。詳しくは、難波田城資料館(☎049-253-4664)へお問い合わせください。



富士見市協働事業提案制度

市民の皆さんと協働でまちづくりを進めるため、市民の皆さんと市が提案・計画段階から協議を行い、事業に取り組む制度です。
問合せ／協働推進課 ☎258

難波田城いきものがかり
小森和雄さん

伝統の逸品であるほうきを皆さんの身近なものにしたい

浦野さんなどの元ほうき職人との出会いをきっかけに、普及活動を始めました。ほうきはこの地域の主要産業であっただけでなく、美と実用を兼ね備えた伝統の逸品です。現在はほうきに関する伝承会を準備中です。ミニほうきなどの現代の生活にあった商品開発や、学校でのホウキモロコシ栽培を働きかけるなどして、ほうきを皆さんの身近なものにしたいと思っています。



ミニほうきはパソコンのキーボード掃除にもピッタリ。ちよつ蔵(難波田城公園内)にて販売中。

「鶴瀬村のほうき草は日本一」

昭和前期から中期、富士見市域(当時の鶴瀬村や水谷村)とふじみ野市域では、ほうきの製造とその材料であるホウキモロコシ(ほうき草)の栽培が盛んで、日本で一番と呼べるほどでした。この地で作られていた主なほうきの種類の一つである「座敷ぼうき」その原型が生まれたのは江戸時代にさかのぼります。上練馬村(現・東京都練馬区)で修行した内田兄弟が大井村(現・ふじみ野市)に伝えたのが始まりとされその後、富士見市域にも広がったと考えられています。

第二次世界大戦時、一度ほうきの生産は停滞しましたが、戦後、再び盛んになりました。

昭和30年代にはホウキモロコシの作付けが県内で300ヘクタール以上あり、富士見市域はその中で最大の生産地で、生産者も500～600戸いたようです。ほうき職人・製造者も市域に70～90人いました。両者を合わせたほうき産業への従事者は県内で最も多い数だったと考えられています。また、鶴瀬村のローム質の台地はホウキモロコシの栽培に適しており、ほうきづくりに最適なふつからした材料が得られました。これが「鶴瀬村のほうき草は日本一」



**富士見市伝統の逸品
座敷ぼうき**

問合せ／難波田城資料館 ☎049-253-4664